**令和５年度　校内研修計画**

　　　　　 　　　　　　大藤小学校

**１　学校課題**

大藤地区は，甲州市塩山地区の東部に位置し，古くから，桃，すもも，ぶどう等の果樹栽培がさかんな緑豊かな地域である。地域の方々や保護者は，学校教育に協力的で，児童は総合的な学習をはじめとする様々な教科等のなかで，安心して地域に出て学習している。また，読み聞かせ等で，地域の方が定期的に学校に来て，児童とふれ合う活動もある。全校児童数は３９名で，年々減少している。今年度は，２・３年生が複式学級となり，学習支援教員を配置していただいて国語・算数等の教科は単級にて指導している。学年の人数が少ないので，休み時間などは異学年で一緒に遊び，上の学年の児童が下の児童のサポートをして，全校児童は仲が良い。その反面，競争心に欠け，場に応じた対応ができないことが課題としてあげられる。また，固定化された人間関係から互いの考えを察することができる面や,親しいが故に時には配慮のない言葉によって，相手を傷つけてしまう場面も見られた。このような実態から,言葉を介して上手に自分を表現できる力の向上やコミュニケーション能力の育成を目指すとともに，授業の中では,自分の考えを伝える手段として,ICTを活用し,自ら考え，判断し，主体的に表現できる児童を育てていきたい。

**２　研究主題**

|  |
| --- |
| **「主体的に表現する児童の育成」**  ～小集団におけるICTを活用した対話的な学びをつくる授業～ |

**３　主題設定の理由**

近年,知識・情報・技術をめぐる変化の速さが増し,情報化やグローバル化といった社会的変化が,人間の予測を超えて進展するようになってきている。また,2019年度末から全世界に広まった新型コロナウイルス感染症による先行き不透明な「予測困難な時代」に加え,先端技術が高度化してあらゆる産業や社会に取り入れられ,社会のあり方が現在とは「非連続的」と言えるほど劇的に変わる「society5.0」時代が到来した。

このように急激に変化し,将来の予測が難しい社会においては,情報や情報技術を受け身で捉えるのではなく,主体的に選択し活用していく力が求められる。子どもたちは,このように変化の激しい時代だからこそ,これからの社会を生き抜くための資質・能力が求められている。そのため，「どのように学ぶか」という学びの質や深まりが重視されている。令和の日本型学校教育では，子どもたちに必要な資質能力と学校が果たす役割として，以下のように述べられている。

・学校の役割として，１０年，２０年先の社会に子どもたちが出ることを意識して教育することが非常に重要。

・人材流動性が高い社会で学び続けていくためには，自分の学びを自分で責任もって学ぶ力の育成が必要であり，コンテンツの点が取れた，取れないと一喜一憂している段階には，もうない。

・学校という場所が，子供たちのウェルビーイングを実現できる場所であるように，友だちと遊べる，楽しい，幸せだと思えるような空間としてデザインをし直さなければいけない時期に来ているのではないか。

「義務教育の在り方ワーキンググループ」より抜粋（文部科学省令和５年１月）

子どもたちが，10年，20年先も自立して生き抜く力を培うために，これからの授業は，「個別最適な学びと共同的な学びの一体的充実」と「学習者主体」を日常化していくことが求められている。子どもが学習内容や学習形態を自ら選択し，協働的に学ぶことで，「主体的・対話的で深い学び」が実現していくものと考えられる。

GIGAスクール構想の実現３年目となり，児童にICTスキルが徐々に備わりつつある昨今，ICTを使って何ができるかを児童が感覚的に捉え始めている。昨年度は，授業において，ICTの使い方を段階的に学ぶだけなく，児童がより主体的に学んでいくために，学習ツールの１つとしてICTをどう活用していくか，教師が探ってきた。授業や学習以外の活動でもICTの活用頻度が増えた。その中で，ICTが効果的であった場面も，アナログの方がよいと感じられる場面もあり，ICT活用のメリット・デメリットについての理解が深まった。

そこで，昨年度の研究の成果を受け，今年度は, より児童の思考を広げ，深めるためにICTを効果的に使っていくことに焦点を当てた研究を進めていきたい。中でも「対話」を重視し，親和的な学級を作るだけでなく，児童同士が関わり合いながら学びを深めていく授業を作っていく。ICTは「即座に」「共有」「変更」「調査」しやすいツールである。対話のための学習用具として，また，児童一人一人の異なる学習状況に対応するために活用していきたい。本校が少人数学級であることを生かし，既存の授業スタイルに拘ることなく，子どもたちが能動的に活動する学習スタイルを目指す。

**４　研究の具体的内容と方法**

1. 教員のICT活用指導力の育成

・・・指導者自身が有効にICTを活用していくため,指導者のICT活用力を高めていく。

・講師を招聘しての研修。

「小集団におけるICTを活用した対話的な学びをつくる授業」の学習方法について

　　　　・校内での実践研修

1. 授業づくり

　　　・・・学力の実態把握と少人数や集団における効果的な学習方法と授業実践

　　　 ・CRT検査，全国学力・学習状況調査を分析して，学習面の成果を把握し，課題を明確にして今後の授業改善に生かす。

　　　　・各種調査で明らかになった児童の課題を改善するための効果的な学習方法の実践をする。

・少人数や小集団，個を生かした「対話的な学び」の実現のための授業実践と検証。

（コミュニケーション，ICTの活用も含む）

　　　 ・甲州市Teacher’s Noteの活用

・めあてと目的を明確にした一人一実践

・授業におけるICT（デジタル教科書・一人一台端末等）の効果的な活用

**（３）**　学級集団づくり　・・・　児童の実態把握と集団づくり

　　　　・WEBQUを生かした児童理解と集団づくり。PDCAサイクルを活用。

・WEBQUの結果分析とアタックシートを活用した集団づくりを行う。また，アタックシートの対応策には，学年全体だけでなく，要支援群に属する児童や，プロットの位置が教師の見とりと違う児童を中心に置いた策も考える。

**（４）**　学びを促す環境づくり　・・・　学校生活の基盤づくり

　・「大藤スタンダード」「家庭教育　子育てＱ&Ａ」「家庭学習の手引き」を活用した家庭学習の効果的な実践の取組。

　　 　　・５つの合言葉の具体的な場面での取組を実践。学年に応じた「大藤スタンダード」の徹底。

　　　　　〈**わくわく**べんきょう〉・・・勉強のスタートは，驚きや疑問，楽しく学ぶ。

　　　　　〈**のびのび**とうこう〉　・・・何事も夢中でする。徹底してする。

　　　　　〈みんな**なかよし**〉　　・・・いじめや仲間外れを生まない集団でいよう。

　　　　　〈**にこにこ**あいさつ〉　・・・あいさつ，返事をしっかりする。

〈**いきいき**かつどう〉　・・・自ら考えて行動する。自分で決めて，自分で守る。

・家庭学習定着を図る環境整備

①「自学ノート」の年間を通しての実施をする。

②家庭学習スタンバイの時間を帰りの会の前にとる。

③家庭学習と授業を有機的に結びつけ，知識探求や学習の復習をする。

④ノートが終わったら，校長先生にも見てもらう。

⑤自学ノートをGoogleクラスルームに写真に撮って掲示する。

　　　　　※担任が随時更新する。学びをうながす点から，良いところやポイント等を入れる。

⑥月・金の朝学習の時間は,各学年学習の時間とし,水については,全学年タイピング練習の時間とする。学習ではAIドリルを活用する。

⑦「大藤スタンダード」に基づき，生活面や学習規律の統一を行う。

⑧大藤・神金・玉宮小で，各学年のクラスルームを作成する。

　※行事の打ち合わせの他，学習発表会などに活用可能。

**５　年間研究計画**

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 回 |  | 研究テーマ | 担当 | 学年 | TC要請 |
| 1 | 4月5日 | 昨年度の研究について | 研究主 | 全 |  |
| 2 | 4月19日 | 今年度の方向性について | 研究主 | 全 |  |
| 3 | 4月26日 | WEBQUとTeacher's Note | 研究主 | 全 |  |
| 4 | 5月24日 | 授業でのICT活用について情報交換会 | 研究主 | 全 |  |
| 5 | 6月 5日 | WEBQU 分析 | 全学年 | 全 |  |
| 6 | 6月21日 | ICTの対話的な授業についての学習会 | 研究主 | 全 | ○ |
| 7 | 7月 5日 | ICTについての学習会（全国学調分析） | 研究主 | 全 |  |
| 8 | 7月12日 | １学期の成果と課題 | 全学年 | 全 |  |
| 9 | 8月18日 | 教育課程還流報告 | 各担当 | 全 |  |
| 10 | 9月13日 | 全国学調分析 | 全学年 | 全 |  |
| 11 | 10月11日 | 一人一実践検証 | 実践学年 | 全 |  |
| 12 | 11月15日 | 一人一実践検証 | 全学年 | 全 |  |
| 13 | 11月29日 | ２学期の成果と課題 | 実践学年 | 全 |  |
| 14 | 1月31日 | 研究のまとめ | 研究主任 | 全 |  |
| 15 | 2月21日 | 今年度の成果と課題・来年度の方向性 | 研究主任 | 全 |  |
| 16 | 2月28日 | 研究紀要作成 | 研究主任 | 全 |  |